

記録  
ビデオ  
カラー／44分

- 企画・発行  
株式会社紀伊國屋書店
- 制作  
桜映画社  
株式会社ボルケ
- 監修  
松本三之介
- 総合監修  
紀田順一郎
- 協力  
吉野作造記念館  
吉野恒子

スタッフ

- 製作  
村山英世
- 脚本・演出  
松川八州雄
- 演出助手  
井上 実
- 撮影  
八幡洋一
- 撮影助手  
西島房宏  
今野聖輝
- 録音  
甲藤 勇
- 編集  
盛田康生
- 選曲  
山崎 宏
- 編集・録音  
東京テレビセンター
- 解説  
北村昌子  
伊藤惣一

映像で語り継ぐ日本の近代を築いた知性の列伝、紀伊國屋書店ビデオ評伝シリーズ「学問と情熱」の第25巻。



デモクラシーへの問い……。

明治維新から10年後、佐幕派であったがために冷遇された陸奥(みちのく)宮城に吉野作造は生まれる。作造の人格は自由民権運動に熱心な父や、旧制二高時に出会ったキリスト教の影響のもと形成されていく。また東京帝国大学時代は、「政治はお国の為でなく人民の為にある」という小野塚喜平次の薫陶を受ける。卒業後、選ばれて清国、袁世凱の息子の家庭教師として派遣され、帰国後は、東京帝大の法科助教教授に。続いてヨーロッパ諸国への留学を経て、民主主義(デモクラシー)が世界の趨勢であることを見る。それらは人間に自由を示し、後の吉野の政治学を深める基盤ともなる。

吉野が唱えた「民本主義」は、日露戦争後の大正デモクラシー風潮と第1次世界大戦後の国際協調気運とも適合して、知識人や労働者たちに歓迎され、一世を風靡した。関東大震災後、帝大を去り、新聞社に入るがすぐにそれも辞し、ひたすら民主主義を説く政治学者と思われていた吉野だが、明治という時代の基礎資料を集めて、明治文化生活会を発足させ、『明治文化全集』を残す。

1933年(昭和8年)1月、入院先で、吉野は55歳で没した。